

14 江戸後期に存在した茶の効能を記す書『茶茗功能記』

岩間真知子

静岡県 富士のくに茶の都ミュージアム

「茶が健康に良い飲み物として真に注目されたのは1960年代以降」と言われる。確かに広く一般に認識されたのは近代かもしれない。だが日本の現存最古の医書、平安時代の『医心方』(984年)以降、医薬書のほとんどに茶の効能は記されていた。それは中国の医薬書に記されていた茶の効能を引用踏襲したためである。中国では茶書も効能を記す。それだけ茶の故郷・中国では茶が養生、健康保持に意味ある飲み物として、生活に欠かせないと認識されていたからだろう。ところが日本では、最初の茶書と称される栄西『喫茶養生記』(1211年, 再治1214年)に茶の効能は謳われるものの、それ以降の茶書は茶会記、名物記など茶会と道具がメインテーマとなり、産地、製法、飲用法、効能など茶そのものについて記すものは無くなってしまふ。そこで効能が注目されたのは近代と言われたのだろう。

さりながら、江戸時代後期に茶の効能を諸書から抜粋し、1冊の書としたものが存在した。享和3年(1803)翠中軒知新による『茶茗功能記』全2巻である。同書の写本は、慶応大学信濃町メディアセンター(北里記念医学図書館)・岩瀬文庫・東北大学狩野文庫に所蔵される。いずれも刊本ではなく、写本である。

著者・翠中軒知新は、『茶道八炉図式』(2巻2冊, 天明5[1785]年自序, 文化8年刊)の著作と「陸羽像」(寛政9[1797]年刊, 1枚の刷り物, 国際日本文化研究センター宗田文庫蔵)も残している。『茶道八炉図式』は、茶室の炉の切り方八種類を図解し、刊行したものである。序には「吏隠 知新菴守知述」、目次には「東都 翠中軒知新撰」とある。吏隠とは、官僚でありながら、世俗の価値観に振り回されず、静寂な心境を保とうとする者という。更に発行書肆は大阪が2軒、江戸が9軒のため、江戸在住の武士であったと推察される。

『茶茗功能記』は、『本草綱目』に始まり『茶経』などの和漢書から縦横に引用している。それだけ当時の日本に茶の情報が多数あり、著者はその情報を理解し利用できる知識階級であったろう。江戸時代、将軍はじめ諸侯は茶の湯の応酬によって互いの交際を深めたため、茶の湯は社交に欠かせぬものであった。貝原益軒は『茶礼口訣』(1699年刊)という茶の湯の心得を説いた書もまとめた。医を業とする人々の茶に対する関心は、実はさらに高かった。

江戸初期の向井元升『庖厨備用倭名本草』(1684刊)の最終巻は茶を項目名とし、漢籍医薬書等からの引用と共に、明代を代表する茶書・張源『茶録』全巻さえ収録する。医師・竹中通庵の『古今養性録』(1692年刊)も医書と共に中国茶書から多くを引用し、茶の風情も楽しんだようだ。いずれも上田秋成の煎茶書『清風瑣言』(1794年)の百年も前のことである。

一方、日本の茶の湯を業とする茶人たち、たとえば五世藪内祥智竹心は『源流茶話』(1701-1716年)で「唐諸公の茶茗を賞せられしより見侍るに、多は閑中の清興、養生の要術にして、我朝の、内に清淨禅味に耽り、外には礼讓質朴を宗として、生をやしなひ、情をのべ、日用世間の益あるにしかず」と、日本の茶会の優位を説く。日本で茶の効用は、社交の手段であった。そうした社会の中で『茶茗功能記』は、茶を日々飲むことによって人間の体に緩やかに効き健康を保持するものであると説く。当時あって、茶の久服の効用を認めたことは注目に値する。茶の機能は、即効性のあるものではなく、日々何度も飲むことによってこそもたらされるものだからである。